

コーヒーブレイク



2列目右から3人目で歌っているのが筆者

男声合唱から受けた衝撃



会員 吉岡 剛 (59期)

今から18年前、私は京都の私立大学に入学した。

桜咲く4月、オリエンテーション期間に1人で大学キャンパス内を歩いていると、背の高い、その大学の学生と思われる男性が近寄ってきて、「君、どこのサークルに入るか決めたんか？ まあ、そんなことより君、腹減ってるやろ？」と声を掛けてきた。

親や隣に住んでいたお巡りさんからは、幼い頃から「知らないおじさんに声を掛けられてもついて行っはいけないよ」と教えられていたが、確かに空腹だった私は「ええ！ 昼ごはんはまだです！」と言って、その先輩が案内するキャンパスそばのお好み焼き屋に同行した。

お好み焼き屋では、私は注文をしなかったのだが、きっと先輩が注文してくれたのであろう、豚玉が出てきた。その豚玉を食していると、その前で先輩が「法学部の楽勝科目（注：比較的容易に単位を取得できる講義）はこれやから」などと言いながら、私の時間割を作ってくれた。

私が豚玉を平らげると、その先輩は「腹もいっぱいになったやろ。デモをやるからもう少し待っていな。」と私に言った。私は、ここが何をやるサークルなのか分からないまま、10分ほど待った。すると、40名ほどの大男が横並びになって、大学の校歌と思われる歌を歌い始めた。しかも、ハモっている（注：和音を奏でる）ではないか！

当時の私にとっては衝撃的だった。目の前の大男はほとんどがトレーナーにジーンズという姿で、お世辞にも洗練されているとは言い難いのだが、こんな美しい

音楽を奏でるとは！ 当時私は弱冠18歳。今まで聴いたことのない音楽のジャンルであった。今もこうして事務所で当時を振り返りながら原稿を書いているとその時受けた衝撃が蘇ってくる。

私は、即日その男声合唱団に入ることに決めた。私が入ると言う先輩はみな万歳をして歓迎してくれた。以来、大学生生活は週4回の歌の日々であった。翌年から同じように新入部員を獲得すると私も万歳をした。ちなみに、私を勧誘した先輩は、合唱団の練習に参加しやすいように時間割を考えてくれていたのだった。

卒業した今も、OB合唱団の一員として歌を歌っている。東京でも大阪でも練習を行っている。最近では、2003年と2008年、京都コンサートホールにて演奏会を開催した。

次に2003年の演奏曲をご紹介します。

大きな古時計、雨（男声合唱曲。作曲：多田武彦氏）、シェナドー（アメリカ民謡）、星に願いを（ディズニー映画「ピノキオ」）、すべての山にのぼれ（ミュージカル「サウンドオブミュージック」）、唱歌メドレーふるさとの四季（故郷、春の小川、朧月夜、鯉のぼり、茶摘、夏は来ぬ、われは海の子、村祭、紅葉、冬景色、雪。アレンジ：源田俊一郎氏）など。

男声合唱（グリー）は素晴らしい。このことは聴いてみれば分かる。歌えばもっと分かる。大声で歌ってすっきりすれば発想の転換にもなる。男声合唱の生演奏を聴かれたことのない方はまず聴いていただきたいと思う。